

## スペイン語における所有形容詞について

その他（別言語等） のタイトル	Possessive Adjectives in Spanish
著者	藤田 健
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	8
ページ	85-103
発行年	2010-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/2694">http://hdl.handle.net/10258/2694</a>

## スペイン語における所有形容詞について

藤田 健

### Possessive Adjectives in Spanish

Takeshi FUJITA

**Abstract** : Spanish has two possessive adjective forms: one of them precedes the noun which it determines and behaves as a clitic form, while the other follows the head noun and cooccurs with an article. In this paper we present the syntactic structures of the noun phrases which contain possessive adjectives, based on the cartographic analysis suggested by Brugè(2002).

Our main proposals are the following: the both possessive adjective forms are merged in the SPEC PosP; and the clitic form raises to D head position due to its feature [+definite], whereas the independent form remains in its original position. With these assumptions, the distributional differences between these two forms are explained in a straightforward way.

**Key words** : possessive adjectives, noun phrases, Spanish

#### 0. 序論

名詞句がどのような構造をもっているかという問題は、節の構造と並んで統語論の領域において中心的な位置を占めるものである。生成文法の分野においても、名詞句に関わる様々な現象が扱われ、その分析は生成文法の理論的発展に大きな役割を果たしてきた。ロマンス諸語における名詞句に関わる現象はその中でも極めて興味深いテーマとして考察が進められ、80年代の原理とパラメータのアプローチの枠組みで Giorgi and Longobardi (1991)を始めとする優れた研究成果が提示された。90年代になって登場した生成文法の新たな段階である最小主義アプローチにおいても名詞句研究の重要性は失われずにはいたが、原理とパラメータのアプローチの時代ほどには進展が見られない状況が続いていた。しかし、2000年代に入り、Guglielmo Cinque や Luigi Rizzi らによって提唱されるカートグラフィーという分析方法が飛躍的に発展することによって、名詞句に関する様々な現象の分析が再び脚光を浴びる段階へと移っている。

所有形容詞は、名詞句構造を考察する上で欠くことのできない極めて重要な要素である。英語の所有形容詞のふるまいから、所有形容詞は決定詞(determiner)の一種であると捉えられることが多いが、ロマンス諸語の所有形容詞を観察すると必ずしもその見方が絶対的なものではないことが分かる。例えば、イタリア語やポルトガル語の所有形容詞は冠詞と共起するという事実は、これらの言語においては所有形容詞が冠

詞とは別の統語的ステイタスを有していることを明確に示している。

本稿が分析対象とするスペイン語の所有形容詞は、他の言語に見られない固有の特性をもっている。すなわち、所有形容詞が名詞に先行する場合と名詞に後続する場合があり、両者で所有形容詞の形態が異なるのである。両者の差異は単に形態的側面にとどまらず、いくつかの統語的側面にも表れる。本稿は、カートグラフィーに基づいて提示されたBrugè(2002)の説明力の高い名詞句構造分析に基づいて、従来説明されなかったスペイン語の所有形容詞に関わる現象が説明可能であることを示すのを目的とする。この分析を通じて、スペイン語における所有形容詞の他の言語には見られない固有の特性が理論的にどのように捉えられるのかという本質的な問題も解決されることになる<sup>1</sup>。

## 1. カートグラフィーによるスペイン語における名詞句の構造

所有形容詞に関する現象を分析するには、この要素が名詞句においてどのように位置づけられるかを確定する必要がある。その前提として、名詞句の構造をどのように捉えるかという基本的立場を明らかにしなければならない。ここでは、本稿が採用する、近年生成文法において展開されているカートグラフィー研究に基づく名詞句構造の分析を概観し、次節での所有形容詞についての分析の土台とする。

カートグラフィーとは、複雑な言語現象を捉える上で有益となる詳細な統語構造を提示する研究手法で、特に生成文法において重要な要素である機能範疇を精密な形で提示するものである。節の構造と並んで、名詞句についても様々な視点からロマンス諸語をはじめとする多くの言語の現象をもとに構造が提示されている。ここでは、その中でもスペイン語の名詞句構造、特に指示形容詞の位置づけに関する代表的な研究と言える Brugè(2002)が提示する名詞句構造を見ていく。

Brugè は、従来の決定詞句(DP)のみでは名詞句に関する種々の統語現象を説明するには不十分であるとし、名詞句の拡張として機能範疇が階層構造をなしていると提案する。この階層構造の最上位には DP が位置し、XP, FP 等がその下位に位置する。D 主要部に冠詞が置かれるのは従来と同様であるが、指示形容詞は FP 指定部、他の形容詞はそれぞれに対応する機能範疇の指定部にそれぞれ生起し、名詞主要部は DP と FP の中間に位置する主要部に移動する。以下に詳細なスペイン語の名詞句構造を示す。(1a)が事象名詞句、(1b)が事物名詞句の構造である。

- (1) a. [DP [XP ... [HP subject-orientedAP H [LP Manner/ThematicAP ] L  
[FP DemonstrativeP F [NP Agent/Exper.PP [N' N ThemePP ]]]]]]  
b. [DP [XP ... [ZP qualityAP Z [HP sizeAP H [LP shapeAP ] L [MP colorAP M  
[OP nationalityAP O [FP DemonstrativeP F [NP PossessorPP [N' N  
Compl.PP ]]]]]]]]]]

<sup>1</sup> 本研究は、平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 19520320) による研究成果の一部である。また、本論文査読委員より貴重なご指摘をいただいた。ここに深く謝意を表したい。

この分析に基づいた具体的な例の構造は、以下のようになる<sup>2</sup>。

(2) a. la respuesta inmediata esta de Juan

the answer immediate this of

“このフアンがすぐ出した答え”

- b. [DP *la* [XP ... [HP [H *respuesta*<sub>i</sub>] [LP *inmediata* [L *t<sub>i</sub>]] [FP *esta* [F *t<sub>i</sub>]] [NP *de Juan* [N' [N *t<sub>i</sub>]]]]]]]]]***

(3) a. el cuadro inglés ese de María

the picture English that of

“そのマリアのイギリスの絵”

- b. [DP *el* [XP ... [MP [M *cuadro*<sub>i</sub>] [OP *inglés* [O *t<sub>i</sub>]] [FP *ese* [F *t<sub>i</sub>]] [NP *de María* [N' [N *t<sub>i</sub>]]]]]]]]]***

この構造では指示形容詞が品質形容詞よりも下位に位置することになるため、指示形容詞が品質形容詞に先行しかつ名詞に後続する例が不可能であると予想される。この予想は、次の例によって実証される。

(4) a. \*la reacción esta desinteresada

the reaction this disinterested

- b. la reacción desinteresada esta

“この無関心な反応”

(5) a. \*el chico ese alto

the boy that tall

- b. el chico alto ese

“その背の高い少年”

また、行為者、対象、所有者、名詞補部の役割を担う前置詞句は指示形容詞に先行することができないと予想されるが、これも実証される。

(6) a. \*la reacción alemana a las críticas esta

the reaction German to the criticism this

- b. la reacción alemana esta a las críticas

“批判に対するこのドイツの反応”

(7) a. \*la reacción imprevisible de Alemania esa

the reaction unexpected of Germany that

- b. la reacción imprevisible esa de Alemania

“その予想外のドイツの反応”

(8) a. \*el cuadro de Juan este de Picasso

the painting of this of

- b. \*el cuadro de Juan de Picasso este

<sup>2</sup> (3)及び後述の(9)の構造において、名詞主要部が H 主要部ではなく M 主要部に位置している。これは Brugè の示した構造をそのまま引用したものであるが、実際にはこの後で名詞主要部が H まで繰り上がることになる。

c. el cuadro este de Juan de Picasso

“フアンのこのピカソの絵”

指示形容詞が名詞主要部に先行する例においては、指示形容詞句が DP 指定部に移動すると主張する。

(9) a. ese cuadro inglés de María

that picture English of

“マリアのそのイギリスの絵”

b.  $[_{DP} \text{ ese}_i \text{ D } [_{XP} \dots [_{MP} [_{M} \text{ cuadro}_j] [_{OP} \text{ inglés } [_{O} \text{ t}_j] [_{FP} \text{ t}_i [_{F} \text{ t}_j] [_{NP} \text{ de María } [_{N'} [_{N} \text{ t}_j]]]]]]]]]$

更に、この分析では指示形容詞が不定数量詞と共起できないという事実も簡潔に説明される。

(10) a. \*algunos libros estos

some books these

b. \*algunos estos libros

指示形容詞が生起する名詞句ではいずれかの段階で指示形容詞が移動し、LF において必ず DP 指定部に指示形容詞が位置して主要部と一致を行わねばならない。すると、その名詞句は指示的な解釈をもつことになるが、この解釈は不定数量詞がもつ存在量化の解釈と相容れないものである。このため、(10)の例が非文となると説明される。

このように、名詞句に関する多様な事実を捉える上で、カートグラフィーによる分析は大変有効なものであると言える。

## 2. 所有形容詞の統語的ステイタス

本節では、Brugè によるカートグラフィーに基づいた名詞句の構造を踏まえ、スペイン語における所有形容詞の統語的ステイタスについて考察を進めていく。

### 2. 1. 独立形所有形容詞の位置づけ

所有形容詞の統語的位置に関して、Brugè は二つの可能性を示唆している。一つは、所有者の前置詞句と同様に NP 内部に位置するというものであり、もう一つは NP の外にある独自の機能範疇の指定部に位置するというものである。Brugè は、所有形容詞が名詞と形態的に一致するという点で NP の外に位置づけられる指示形容詞や品質形容詞と共通しているという事実を挙げ、理論的には後者の分析が望ましいとしている。

スペイン語の所有形容詞には名詞に先行する形式と後続する形式があり、両者は形態的に区別される。後者は音韻的に独立した形式としてふるまうので、独立形所有形容詞と呼ぶこととする。この独立形所有形容詞は、他の形容詞と共起した場合にいずれの形容詞にも後続する。

- (11) a. la reacción desinteresada suya  
the reaction disinterested his  
“彼の無関心な反応”

b. \*la reacción suya desinteresada

- (12) a. el libro este suyo de sintaxis  
the book this his of syntax  
“彼のこの統語論の本”

b. \*el libro suyo este de sintaxis (Brugè2002)

このことから、独立形所有形容詞に対応する機能範疇は指示形容詞に対応する FP よりも下位に位置すると想定される。Brugè は所有形容詞に対応する範疇についてはこれ以上言及してはいないが、本稿ではこの分析を採用し、PosP というラベルを用いることとする。この考え方に基つくと、(12a)の構造は以下ようになる。

- (13) [DP el [XP ... [HP [H libro<sub>i</sub>][FP este [F t<sub>i</sub>] [PosP suyo [Pos t<sub>i</sub>] [NP [N t<sub>j</sub>] de sintaxis]]]]]]]

## 2. 2. 接語形所有形容詞の位置づけ

名詞に先行する所有形容詞は、音韻的に後続する要素に依存するという特性をもっている。Brugè はこれを接語(clitic)であると分析しているが、(14)の事実がその分析を支持する。そこで、この要素を接語形所有形容詞と呼ぶこととする。

- (14) a. \*mi y su compañera  
b. la compañera suya y mía  
the companion his and my  
“彼と私の仲間”

(Carme Picallo and Rigau1999)

(14a)は、独立形所有形容詞と異なり、接語形所有形容詞を等位接続の環境に置くことが不可能であることを示している。これは、接語としてのステイタスをもつ人称代名詞クリティックと共有する性質である。

- (15) \*Juan te y la quiere.  
you and her loves

この事実から、接語形所有形容詞は独立形所有形容詞とは全く異なる統語的位置を占めていると言える。接語形所有形容詞が占める位置について重要な示唆を与える事実が、冠詞と共起できないというものである。

- (16) a. \*un mi hermano  
a my brother  
b. \*el mi hermano  
the my brother

この事実をもとに、Giorgi and Longobardi (1991)はスペイン語の接語形所有形容詞は表層において冠詞が占める位置、すなわち D 主要部を占めていると分析している。本

稿もこの分析に従うこととする。

次に問題となるのは、接語形所有形容詞がもともと D 主要部を占めるのか、移動によりこの位置を占めるのかという点である。この問題を考察する上で重要なのは、所有形容詞は名詞句において「所有者」の  $\theta$  役割を担う要素であるという事実である。本来  $\theta$  役割を担う要素は、基底において  $\theta$  役割を付与する要素の投射内に位置づけられるのが一般的である。しかし、本稿では Brugè の示唆に従って NP の外の PosP 指定部に位置するという分析を提案した。この分析に従うと、N 主要部が Pos 主要部を経由して移動する際に、N から独立形所有形容詞に対して  $\theta$  役割が付与されるということになる。独立形であれ接語形であれ「所有者」という  $\theta$  役割を担う点では共通しているので、基底においては同じ構造的 position を占めると考えるのが望ましい。そこで本稿では、接語形所有形容詞は基底では PosP 指定部の位置を占めており、主要部移動によって D 主要部に移動すると提案する。具体的には、以下のように示される。

(17) a. *mi hermano*

my brother “私の兄”

b.  $[DP\ m\bar{i}\ [XP\ \dots\ [HP\ [H\ t_i\ hermano_j][PosP\ t_i\ [Pos\ t_j][NP\ t_j]]]]]$

この構造では、PosP 指定部にある接語形所有形容詞の主要部が N 主要部とともに H 主要部に移動し、その後接語形主要部が単独で D 主要部に移動している<sup>3</sup>。

このように、接語形所有形容詞は基底の位置では独立形所有形容詞と同じ位置を占めているが、何らかの理由によって主要部移動が適用される要素なのである。次に、その移動の理由を考察する。

## 2. 3. 接語形所有形容詞の意味的特性

スペイン語の接語形所有形容詞の特性を考察する上で示唆的なのは、同じロマンス諸語に属するポルトガル語やイタリア語の所有形容詞の分布である。両言語の所有形容詞は、スペイン語と同様に名詞に先行する場合も後続する場合もある。しかし、スペイン語と異なるのは、名詞に先行する形式と後続する形式が形態的に同一であるという点と、名詞に先行する形式が冠詞と共起するという点である。(18)はポルトガル語の例、(19)はイタリア語の例である<sup>4</sup>。

(18) a. *os meus amigos*

the our friends

“私の友人”

b. *um livro meu*

a book my

“私の本 (の中の 1 冊)”

<sup>3</sup> この移動は一般に *excorporation* と呼ばれる。*excorporation* については、Roberts(1991)を参照されたい。

<sup>4</sup> ポルトガル語では、所有形容詞が定冠詞と共起する場合には名詞に先行し、不定冠詞と共起する場合や無冠詞の場合には名詞に後続する。イタリア語では所有形容詞が一般に冠詞と共起し、名詞に先行する語順が無標である。所有形容詞が名詞に後続する場合には、所有形容詞に焦点が置かれる解釈となる。

- (19) a. *la sua casa*  
the his/her house  
“彼（女）の家”

- b. *la casa sua*  
the house his/her

以上の事実は、これらの言語における所有形容詞がクリティックとしての特性をもっていないことを示している。名詞との語順を説明するには、二つの分析の可能性が考えられる。一つは名詞主要部の移動先の違いによって語順の違いが生じるという分析であり、もう一方は所有形容詞の移動の有無によって生じるというものである。本稿が前提としているカートグラフィーの構造分析では、名詞主要部はあらゆる場合に特定の機能範疇の主要部（具体的にはH主要部）まで移動することが仮定されている。従って、上記の語順の違いは、所有形容詞の移動の有無によって引き起こされると分析することになる。所有形容詞が名詞に先行する場合には、所有形容詞が名詞に先行する位置、すなわちXP指定部に移動するのに対して、名詞に後続する場合にはPosP指定部にとどまるのである<sup>5</sup>。具体的には以下のように示される。

- (20) a. *la sua casa*

- b. [DP *la* [XP *sua*<sub>i</sub> ... [HP [H *ti* *casa*<sub>j</sub>]] [PosP *ti* [Pos *t<sub>j</sub>]] [NP *t<sub>j</sub>]]]]]**

- (21) a. *la casa sua*

- b. [DP *la* [XP ... [HP [H *casa*<sub>i</sub>]] [PosP *sua* [Pos *t<sub>i</sub>]] [NP *t<sub>i</sub>]]]]]**

いずれの場合も所有形容詞は DP 内の位置は占めないで、名詞句全体の指示に関する限定機能に関与することはないと言える。

これに対して、スペイン語の接語形所有形容詞は移動により、本来冠詞が占めるべきD主要部の位置にある。このことは、接語形所有形容詞が冠詞の機能を果たしていると考えられる。具体的には、PosP内にとどまったままの独立形所有形容詞とは異なり、接語形所有形容詞は冠詞のもつ素性を持っており、この素性の照合のためにD主要部まで移動しなければならないのである。D主要部をしめる冠詞が音韻的にアクセントをもたない要素であることから、この位置は接語としての性質をもつ要素が占める位置であり、焦点となる要素が生起しえない位置であると考えられる<sup>6</sup>。接語形所有形容詞はまさにこの特性を備えた要素であり、意味的にも音韻的にも冠詞と同じ

<sup>5</sup> 所有形容詞の XP 指定部への移動を動機づける素性に関しては、ポルトガル語とイタリア語で異なっていると考えられる。イタリア語では冠詞の種類にかかわらず所有形容詞が名詞に先行することも後続することも可能であり、名詞に後続する場合には所有形容詞に焦点が置かれる。このことから、所有形容詞が[一焦点]という素性を担う場合に移動が引き起こされることが考えられる。

これに対して、ポルトガル語では名詞の定性が語順に関与している。一般に名詞が定冠詞を伴うなど定の解釈をもつ場合に、所有形容詞が名詞に先行する。このため、[+定]という素性が移動に関与していると考えられる。この点では、後に述べるスペイン語の接語形所有形容詞のもつ素性と共通していると言える。

<sup>6</sup> 定冠詞と異なり、不定冠詞はアクセントを担うことが可能である。この場合、「一つの」という数詞としての機能が強められる。このような例にはいくつかの分析の可能性が考えられるが、一つの可能性として、他の数詞と同じように数詞が生起する位置(NumP 指定部等)を占めており、D 主要部を占める不定冠詞とは異なる要素であると分析できるであろう。



性質をもつことによってD主要部の位置を占めることが認められると言える。接語形所有形容詞が、具体的にどのような素性をもっているかについては、次節で考察する<sup>7</sup>。

### 3. 所有形容詞に関わる特徴的な現象

本節では、Brugè において扱われていない所有形容詞に関わる興味深い現象を提示し、所有形容詞の意味的特性を考慮に入れながらそれらの現象が Brugè の枠組みにおいてどのように説明されるかを検討していく。

#### 3. 1. 不定数量詞との共起

接語形所有形容詞と独立形所有形容詞には、意味特性上も興味深い対立が見られる。前者は、特定の数量形容詞と共起できないという分布上の制約が観察されるのである。

- (22) a. \*tus algunas obras  
your several works  
b. \*su cualquier vecino  
his any neighbour  
c. \*mi cierto artículo  
my certain article  
d. \*nuestra cada fotografía  
our each photo (Carme Picallo and Rigau1999)

このような表現は、独立形所有形容詞を用いると文法的となる。

- (23) a. algunas obras tuyas  
several works your  
“君のいくつかの作品”  
b. cualquier vecino suyo  
any neighbour his  
“彼のどの隣人も”  
c. cierto artículo mío  
certain article my  
“私のある論文”  
d. cada fotografía nuestra  
each photo our  
“それぞれの私たちの写真”

また、数量形容詞を、対応する数量代名詞に替えると接語形所有形容詞の使用も可能となる。

<sup>7</sup> Giorgi and Longobardi(1991)は、接語形所有形容詞の移動の動機づけを[+strong]という素性に帰しているが、この素性が具体的にどのような意味的特性と関連付けられるのかについては議論されていない。

- (24) a. *algunas de tus obras*  
several of your works  
“君の作品のいくつか”  
b. *cualquiera de sus vecinos*  
any of his neighbour  
“彼の隣人たちの誰も”  
c. *cada una de nuestras fotografías*  
each one of our photos  
“私たちの写真のそれぞれ”

これらの例においては接語形所有形容詞に前置詞“de”が先行しているため、数量詞は名詞句の拡張である機能範疇内に位置しているとは考えられず、上記の共起制限が適用されないことになる。具体的には、以下のような構造となる。

- (25)  $[_{QP} \textit{algunas} [_{PP} \textit{de} [_{DP} \textit{tus}_i [_{XP} \dots [_{HP} [_{H} \textit{ti} \textit{obras}_j] [_{PosP} \textit{ti} [_{Pos} \textit{t}_j] [_{NP} \textit{t}_j]]]]]]]$

この構造では DP 内に共起制限が適用される要素が生起していないために、文法的となる。

これらの言語事実が示しているのは、接語形所有形容詞が独立形所有形容詞と異なる意味的特性をもっているということである。前者が共起できない数量形容詞に共通するのは、集合の中の不定の要素を選択する機能をもつという特性である。“cada”は集合内の全ての要素を選択する機能をもつが、その抽出過程において「どの要素を取り出しても」という視点が取られ、不定の意味機能を含んでいると言える。“cada”が常に単数形で用いられるという事実も、この要素の不定性を表していると言える。この点において、集合内の全ての要素を一括りに選択し、不定の意味機能を含まない“todo”とは異なっている。実際、“todo”は接語形所有形容詞と共起が可能である<sup>8</sup>。

- (26) *todos mis familiares*  
all my family (members)  
“私のすべての家族”

これはまさに、接語形所有形容詞が冠詞としての意味機能をもっていることの証であると言える。具体的には、定冠詞がもつ[+定]という意味素性をもっていると仮定することができる。この仮定により、接語形所有形容詞に見られる制約は次のように理論的に説明される。

Brugè の提案する名詞句構造においては、DP 内のすべての主要部が同じ素性をもつと仮定されている。従って、接語形所有形容詞が生起する DP においてはすべての主要部が[+定]という素性を共有しなければならない。ここで、不定の意味をもつ数量形

<sup>8</sup> “todo”は名詞句内に生起する場合には他のあらゆる要素に先行するという特性をもつ。

*todos los estudiantes*  
all the students “すべての学生たち”

このため、接語形所有形容詞と共起する場合にもこれに先行する。

容詞が生起している構造を考えてみよう。

(27) [DP *tus*<sub>i</sub> [XP *algunas* [X *t<sub>i</sub>*][HP [H *t<sub>i</sub>* *obras*]<sub>j</sub> [PosP *t<sub>i</sub>* [Pos *t<sub>j</sub>*][NP *t<sub>j</sub>*]]]]]

ここで、XP において主要部 *t<sub>i</sub>* は D 主要部を占める接語形所有形容詞のもつ[+定]の素性をもつ。これに対して、XP 指定部に位置する数量形容詞“*algunas*”は不定の意味をもつ要素であるため、[−定]という素性をもっているはずである。すると、同じ投射内に相反する素性をもつ要素が共起しているために、適切な意味解釈が得られる構造とはならない。このために(27)の構造は破綻し、対応する文(22a)が非文となるのである。

このように、前節で提案した接語形所有形容詞の分析により、その分布上の制約がカートグラフィーによる構造分析によって極めて簡潔に説明されるのである。

### 3. 2. 被所有者名詞の等位接続

所有形容詞の統語的ステイタスに関連する現象として、被所有者名詞の等位接続が挙げられる。これは、所有される名詞、すなわち名詞主要部が等位接続詞によって連結される例である。

(28) *Mi abogado y jefe suyo es algo antipático.*

*my lawyer and boss his is rather disagreeable*

“私の弁護士で彼の上司である人はいささか嫌な人である。”

(Carme Picallo and Rigau1999)

この例は、私の弁護士であると同時に彼の上司である一人の人物を叙述した文である。ここで留意すべきは、等位接続された最初の名詞に接語形所有形容詞が先行しているのに対し、二つ目の名詞には独立形所有形容詞が後続している点である。もし二つ目の名詞にも接語形所有形容詞が先行する場合には、二人の別の人物を指示することとなる。これに対応する例で独立形所有形容詞が用いられる場合には、定冠詞も繰り返される。

(29) a. *Mi abogado y su jefe llegaron ayer.*

*my lawyer and his boss arrived yesterday*

“私の弁護士と彼の上司が昨日到着した。”

b. *El abogado mío y el jefe suyo llegaron ayer.*

*the lawyer my and the boss his arrived yesterday*

(*ibid.*)

(29)は主要部名詞の等位接続ではなく、二つの独立した名詞句の等位接続となっている。主語と一致する動詞“*llegaron*”が複数形となっている事実もそのことを端的に示している。

この事実は、スペイン語の接語形所有形容詞のもつ特異な性質と関係している。それは、所有者が同一である名詞句を等位接続した場合、接語形所有形容詞を繰り返さねばならないというものである。接語形所有形容詞が一つしか生起しない場合には、被所有者名詞の等位接続となり、名詞句全体が指示するのは単一の実体となるのである。

(30) a. mi chaqueta y mi corbata

my jacket and my tie

“私のジャケットとネクタイ”

b. mi amigo y colega

my friend and colleague

“私の友人であり同僚である人”

このように、スペイン語では別の実体を指示する複数の名詞句には、それぞれ所有形容詞が必要となるのである。

上記の現象は、接語形所有形容詞が D 主要部を占めるという本稿の仮定によって簡潔に説明されるものである。独立した名詞句にそれぞれ対応しなければならないという特性は、冠詞にも共有されているからである。以下のように、指示対象が異なる名詞句を等位接続する場合には、冠詞をそれぞれの名詞句に対応させなければならない。

(31) a. el sol y la luna

the sun and the moon

“太陽と月”

b. un perro y un gato

a dog and a cat

“犬と猫”

c. ?el perro y gato

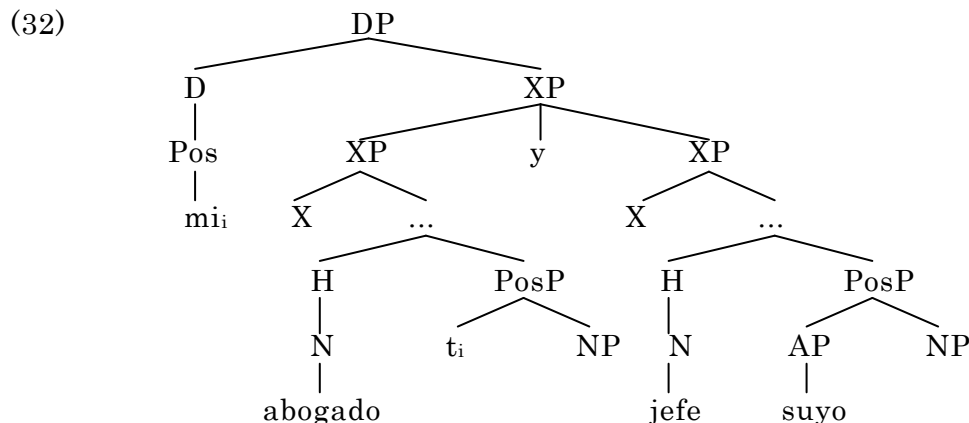
the dog and cat

“犬と猫の雑種”

(Butt and Benjamin 2004)

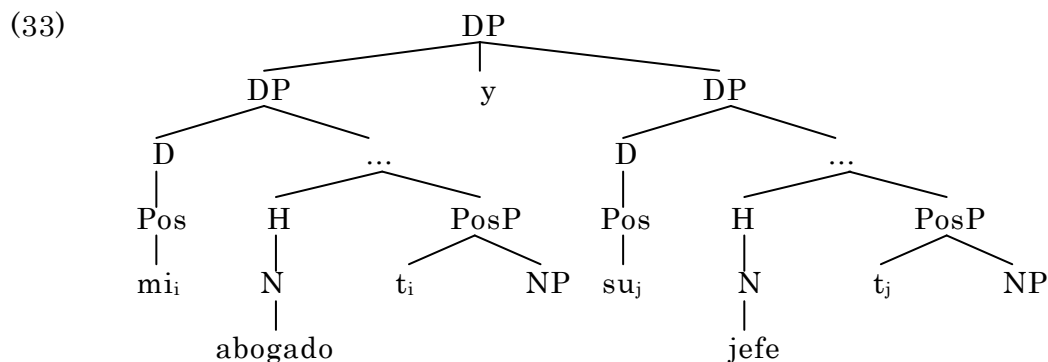
接語形所有形容詞が冠詞と同じ D 主要部を占めるのであれば、冠詞と同様に名詞句の指示性を確定するという機能をもつはずである。すると、等位接続構造において接語形所有形容詞が繰り返された場合には、それは指示対象の異なる独立した名詞句の等位接続を意味するのである。逆に、指示対象が一つの実体である場合には、名詞句としては一つに過ぎないので、接語形所有形容詞が繰り返されず、冠詞としての機能をまったくもたない独立形所有形容詞が用いられることになる。被所有者名詞の等位接続である(28)の主語名詞句の構造と、二つの独立した名詞句の等位接続である(29a)の主語名詞句の構造を以下に示す。

(28) Mi abogado y jefe suyo es algo antipático.



(32)では DP 内の XP の等位接続構造となっており、第一要素である名詞の PosP 指定部に生起する接語形所有形容詞が D 主要部に移動する。従って、名詞句全体としては一つの DP に対応しており、一つの実体を指示する解釈となる。

(29) a. Mi abogado y su jefe llegaron ayer.



これに対して、(33)では DP の等位接続構造となっており、二つの D 主要部の位置にそれぞれの接語形所有形容詞が移動している。

### 3. 3. 属格表現の重複

#### 3. 3. 1. 接語形所有形容詞の場合

スペイン語の所有形容詞に関して特徴的な現象の一つに、属格表現の重複が挙げられる。これは、属格に対応する表現として所有形容詞と前置詞句が共起するというものである。スペイン語においては、この現象は接語形所有形容詞の 3 人称の形式に限られる。この重複現象には地域差が見られ、スペインにおいて用いられるスペイン語（半島スペイン語）においては 2 人称敬称表現に限られるという制約がある<sup>9</sup>。これは、スペイン語では 2 人称敬称表現が文法上 3 人称としてカテゴリー化されているという特徴に起因している。所有形容詞“su”のみでは、発話者と対話者以外の人・事物を指すのか対話者（を含む複数の人）を指すのかが明らかでないために、前置詞句で明示するのである。

<sup>9</sup> “su”という形式は 3 人称なので、本来英語では his/her/its に対応するが、2 人称敬称で用いられる場合には誤解を避けるため例文の注では“your”と表示することとする。

- (34) a. su libro de usted  
your book of you-sg.  
“あなたの本”  
b. su abuelo de ustedes  
your grandfather of you-pl.  
“あなた方のおじいさん”

これに対して、ラテンアメリカで用いられるスペイン語（大陸スペイン語）においては、本来の 3 人称の用法としても許容される場合が多い。これは、スペイン語の所有形容詞は 3 人称において性・数の区別が中和されるという特徴によるものと考えられる。

- (35) a. su novio de Juana  
her boyfriend of  
“フアナの恋人”  
b. su pulque de ellos  
their pulque of them  
“彼らのプルケ酒”

この用法には、重要な制約が二つ観察される。一つは、属格表現が有生物を指示する場合にのみ可能であり、無生物では不可能である。ただし、無生物であっても解釈上有生と捉えられる場合には可能となる。(36b)では、航空会社が構成員を示す集合名詞として解釈されるので、属格表現の重複が見られるのである。

- (36) a. \*su capítulo del libro  
its chapter of-the book  
b. sus nuevos aviones de Aeroméxico  
its new plane of  
“アエロメヒコの新しい飛行機” (Carme Picallo and Rigau1999)

もう一つの制約は、属格表現が所有者の意味役割を持つ場合にのみ可能であり、その他の意味役割では不可能であるというものである。

- (37) a. \*sus problemas de la gente  
their problems of the people  
b. su retrato de usted  
your portrait of you  
“あなたの肖像画” (ibid.)

(37a)では、“問題”という抽象名詞に属格表現が関係づけられているために、属格表現が表すのは具体的な所有関係ではなく、経験者・対象といった抽象的な関係である。このため、重複が不可能となる。(37b)は文法的な表現であるが、解釈に制約が課される。通常“肖像画”という事物名詞に属格表現が結び付けられる場合、属格表現が所

有者・動作主・対象という三つの意味役割で多義的となるが、(37b)では所有者としての解釈のみが可能となる。

これら二つの制約が示唆するのは、所有形容詞、属格表現及び名詞主要部の三者の間の関係付けにおいて意味的特性が関与するということである。この関係付けを統語的に保証する必要があるが、そのために所有形容詞と属格表現の統語的位置を確定しておこう。Brugè の仮定に従うと、属格表現が生起する位置は NP 内で、所有形容詞の位置は PosP 指定部ということになる。Pos 主要部は N 主要部が最終的に D 主要部に位置するための移動で経由するため、所有形容詞の位置とは理論上なりえない。しかし、この分析を重複現象にそのまま適用すると、属格表現と所有形容詞が別の投射内に位置することとなり、統語的關係付けが困難となる。特に、スペイン語の当該現象では人称に関する厳しい制約が課されるので、両者の緊密な関係付けが要求され、これを満たすには同一の範疇の投射内に両者を位置づけるのが理論的に望ましいと言える。そこで、本稿では両者が PosP 内に生起すると仮定したい。具体的には、二重指定部構造を仮定し、以下のようにいずれも PosP 指定部に位置すると考える。

(38) ...[PosP *su* [Pos' [*de Juana*] Pos ...]]...

この構造を仮定することによって、属格表現の有生性に関する制約を捉えることができる。所有形容詞と属格表現は PosP 内に共起することで、同一指標付けによって連鎖を形成する。これにより、二つの要素が一つの  $\theta$  役割を担うことが可能となる。この同一指標付けの条件として、有生性、更には人称という素性の一致が課されるのである。

ここで、なぜこのような条件が課されるかについて言及しておきたい。そもそも属格表現は明示的に表したいのであれば前置詞句を用いるだけで十分であり、所有形容詞を用いる必然性は全くない。実際、重複現象が見られない場合には、所有形容詞ではなく、定冠詞が用いられる。

(39) a. el capítulo del libro

the chapter of the book

“その本の章”

b. los problemas de la gente

the problems of the people

“人々の問題”

(*ibid.*)

わざわざ所有形容詞を重複して用いるということは、あらかじめ所有者を漠然と提示し、更に詳細な情報を付加するという特殊な操作を行うことを意味する。このような特殊な操作を行うには、所有者の存在が顕著であるという必要がある。有生物、特に人間は現実世界において最も注意をひく顕著な存在であり、逆に無生物は注意をひきにくい要素である。このことから、属格表現の重複には、所有者の有生性という条件が課されていると考えられる。

次に、所有者という  $\theta$  役割に限定されるという制約に関しては、名詞主要部から属

格表現への  $\theta$  役割付与という観点から説明される。既に述べたように、通常の属格名詞句は NP 内に生起し、名詞主要部から  $\theta$  役割を付与される。これに対して、本稿の分析では、所有形容詞と属格表現が同一指示で重複する場合には、属格表現が PosP 内に生起することになる。そこで、PosP 内に生起する属格表現には所有者という  $\theta$  役割のみが付与可能であると仮定することによって、この制約が説明される。名詞主要部は、名詞句構造において最上位にある DP によって直接支配される範疇の主要部まで移動する。この移動において、名詞主要部は Pos 主要部も経由する。属格表現と所有形容詞によって構成される連鎖に対する  $\theta$  役割付与は、この段階で行われるということになる。

では、PosP 内に生起する属格表現にはなぜ所有者以外の  $\theta$  役割が付与できないのであろうか。これは、所有者という  $\theta$  役割の持つ特殊性によるものと考えられる。本来  $\theta$  役割とは、主要部要素の意味内容を完全なものにするために不可欠な要素との関係を保証するための概念である。他動詞やその派生名詞の場合には、動作主・対象という項がその意味内容を完全なものとするために必要となるが故にこれらの  $\theta$  役割が関与することになる。これに対して、所有者項は、それが存在しなければ名詞の意味が完結しないという性質の要素ではない。例えば、「本」という概念はその所有者がなければその概念が完結しないということはある得ない<sup>10</sup>。つまり、所有者という  $\theta$  役割は他の  $\theta$  役割に比して二次的な性質をもつものであると言える。このことから、NP 内でなくとも付与が可能となると考えられるのである。

### 3. 3. 2. 独立形所有形容詞の場合

接語形所有形容詞の場合と異なり、独立形所有形容詞は属格表現の重複が許容されない。

- (40) a. \*la casa suya de usted  
the house your of you  
b. \*un amigo suyo de él  
a friend his of him  
c. \*este hermano suyo de Juan  
this brother his of

この事実は、独立形所有形容詞が接語形所有形容詞にはない統語的特徴を有することを示唆している。その統語的特徴を考察する上で有効となるのが、独立形所有形容詞と属格表現が同じ PosP という投射内に位置するという本稿の分析である。以下に(40a)の構造を示す。

- (41) [DP la [XP ... [HP [H casa<sub>i</sub>][PosP suya [Pos' [de usted]<sub>i</sub>][NP t<sub>i</sub>]]]]]

同じ投射内に複数の要素が共起することを妨げる要因としてまず考えられるのが、素性照合である。つまり一つの主要部が素性を照合できるのは一つの要素に限られるの

<sup>10</sup> 親族名称の場合には、所有者の存在がより重要な役割を果たすことは否めないが、例えば「母」という概念が必ず所有者を前提とするかという点必ずしも自明ではないと言えよう。



で、もう一つの要素の素性が照合されずに派生が破綻するのである。本稿では、独立形所有形容詞がもつ格素性が関与すると考えたい。所有者が名詞句である場合には、名詞句は前置詞“de”によって標示される属格素性をもっている。この格素性は、Pos 主要部によって照合されると考えられる。ここで、独立形所有形容詞も属格素性をもっているとしよう。すると、PosP 内に属格の照合を必要とする要素が二つ存在することになる。Pos 主要部は一つの属格素性しか照合できないので、所有形容詞か属格表現名詞句のいずれかの格素性が照合できないために、派生が破綻すると説明される。

これに対して、3.3.1 で考察した接語形所有形容詞は、冠詞と同様に格素性をもたない要素であるとする、属格表現との重複が許されるという事実が捉えられる。属格表現名詞句が Pos 主要部によって適切に格照合され、接語形所有形容詞は D 主要部に移動することによってそれぞれ認可されるのである。

#### 4. 結論

本稿では、Brugè によって提案されたカートグラフィーに基づく名詞句構造の分析において、スペイン語の2種類の所有形容詞がどのように捉えられるかについて考察し、関連する現象に対する分析を提示した。まず、NP を直接支配する機能範疇として PosP を設定し、接語形所有形容詞と独立形所有形容詞のいずれの形式も基底の構造では PosP 指定部に導入されると仮定した。次に、独立形所有形容詞はこの位置にとどまったままであるのに対し、接語形所有形容詞は冠詞のもつ[+定]という素性をもつことから同じ素性をもつ D 主要部に移動すると提案した。また、接語形所有形容詞は格素性をもたないのに対し、独立形所有形容詞は属格素性をもつという統語的特性の違いがあることも主張した。本稿の分析を前提とすれば、従来未解決であった所有形容詞に関するいくつかの現象が簡潔に説明されることが示された。

ここで、本稿の提案する名詞句構造にとって一見反例となるように思われる現象について言及しておきたい。所有形容詞が名詞に後続する語順では、(11a)に示されるように、形容詞句が所有形容詞に先行することから、本稿の分析では所有形容詞が名詞句の拡張である機能範疇の中で最下層に位置することになる。

- (11) a. la reacción desinteresada suya  
the reaction disinterested his

また、(12a)に示されるように、機能範疇の投射内に位置する所有形容詞は名詞の補部となる要素に先行することになる。

- (12) a. el libro este suyo de sintaxis  
the book this his of syntax

しかし、これらの例とは逆に、名詞に後続する独立形所有形容詞が形容詞句に先行する例(42)や、独立形所有形容詞が名詞の補部である要素に後続する例(43a)が観察される。

(42) a. Un mensaje suyo muy misterioso fue encontrado en la biblioteca.

a message his very mysterious was found in the library  
“彼のとても不思議なメッセージが図書館で見つかった。”

b. Cierta amiga suya bastante olvidadiza se dejó el sombrero en el  
certain friend his sufficiently forgetful left the hat in the  
zaguán.  
entrance hall

“彼のある忘れっぽい友人が玄関ホールに帽子を置き忘れた。”

(43) a. Resolvieron un recurso de alzada suyo.

(they) solved a appeal of retrial his  
“彼の再審請求が認められた。”

b. Resolvieron un recurso suyo de alzada.

(they) solved a appeal his of retrial

これらの例に共通するのは、名詞句の最後に位置する要素に焦点が置かれる解釈となるという点である。(42)の例では、形容詞の前に、形容詞が表す性質の程度が高いことを示す副詞が共起していることから、形容詞によって表わされる情報に焦点が置かれることになる。また、名詞の補部となる要素が所有形容詞に先行している(43a)に対して、所有形容詞に後続している(43b)では名詞の補部である“de alzada”に焦点が置かれる傾向がある。従って、これらの例は基本となる語順ではなく、焦点化される要素を名詞句の最後の位置に置くための移動が関与した構造であると考えることができる<sup>11</sup>。本稿が所有形容詞に関連して提案した名詞句構造、更にはBrugèが名詞句一般について提示した構造は、あくまでも基本となる語順の構造を示しているものであり、情報構造に関わる要因によって移動が適用され、基本と異なる語順が具現化されることもあるのである。

カートグラフィーは、名詞句のみならず節についても多様な統語現象を説明するための基盤を与える分析手法であり、生成文法の今後の新たな展開の一つの方向性として極めて有力なものであると言える。この分析手法の展開において原動力となっているのが、Belletti(2004), Rizzi(2004), Cinque(2006)等のロマンス諸語における諸構文の分析である。このことから分かるように、今後の生成文法の発展において、英語には観察されない多くの興味深い現象を有するロマンス諸語が重要な位置を占めることが予想される。最小主義アプローチの誕生以来、理論の精緻化を目指す方向性が飛躍的な進歩をとげる一方で、様々な統語現象を簡潔に説明するという経験的側面での拡がりが必要と十分であるとは言えない状況にあった。カートグラフィーの登場とともに、言語学の醍醐味である多種多様な言語現象の解明という方向性に、従来には見られなかった進展が今後大いに期待されよう。

<sup>11</sup> このような移動がどのレベルにおいて行われるかについては、ここで詳しく論ずる余裕はないが、このように文の論理的意味ではなく情報構造に関わる移動はPFにおいて行われるという可能性がある。情報構造上価値の高い要素を文末に移動する重名詞句移動も同種の移動であると考えられる。

参考文献

- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Belletti, Adriana (2004) “Aspects of the Low IP Area”, In Luigi Rizzi (ed.) *The Structure of AP and IP*, pp. 16-51, Oxford University Press, New York.
- Burgè, Laura (2002) “The Position of Demonstratives in the Extended Nominal Projection”, In Guglielmo Cinque (ed.) *Functional Structure in DP and IP*, pp. 15-53, Oxford University Press, New York.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold, London.
- Carme Picallo, M. and Gemma Rigau (1999) “El posesivo y las relaciones posesivos”, In Ignacio Bosque and Violeta Demonte, *Gramática Descriptiva de la Lengua Española 1*, pp. 973-1023, Espasa, Madrid.
- Chomsky, Noam (1995) *Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_ (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework”, In Roger Martin et al.(eds.) *Step by Step*, pp.89-155, The MIT Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_ (2001) “Derivation by Phase”, In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, pp.1-52, The MIT Press, Cambridge.
- Cinque, Guglielmo (1995) *Italian syntax and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_ (2006) *Restructuring and Functional Heads*, Oxford University Press, New York.
- Demonte, Violeta (1991) *Teoría Sintáctica: De Las Estructuras a La Rección*, Editorial Síntesis, Madrid.
- Giorgi, Alessandra and Giuseppe Longobardi (1991) *The syntax of Noun Phrases*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Giusti, Giuliana (2002) “The Functional Structure of Noun Phrases: A Bare Phrase Structure Approach”, In Guglielmo Cinque (ed.) *Functional Structure in DP and IP*, pp. 54-90, Oxford University Press, New York.
- Graffi, Giorgio (1994) *Sintassi*, il Mulino, Bologna.
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government & Binding Theory 2nd Edition*, Blackwell, Oxford.
- Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris Publication, Dordrecht.
- Mateus, Maria Helena Mira et al. (2003) *Gramática da Língua Portuguesa*, Caminho, Lisbon.
- Perini, Mário A. (2002) *Modern Portuguese*, Yale University Press, New Haven and London.
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic theory and the structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_ (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.
- Rizzi, Luigi (2004) “Locality and Left Periphery”, In Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond*, pp. 223-251, Oxford University Press, New York.

Roberts, Ian (1991) "Excorporation and Minimality", *Linguistic Inquiry* 22, pp.209-218.

Zagona, Karen (2002) *The Syntax of Spanish*, Cambridge University Press, Cambridge.

藤田 健 (2008) 「ポルトガル語における名詞句の統語構造」, 『北海道大学文学研究科紀要』第 124 号, pp.103-135.

執筆者紹介

氏名：藤田健

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail：fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学